

第 1538 回 京都市教育委員会会議 会議録

1 日 時 令和 8 年 1 月 29 日 木曜日
開会 9 時 00 分 閉会 10 時 30 分

2 場 所 京都市役所北庁舎 7 階 教育委員室

3 出席者 教 育 長 稲田 新吾
委 員 野口 範子
委 員 笹岡 隆甫
委 員 石井 英真
委 員 松山 大耕
委 員 濱崎 加奈子

4 欠席者 なし

5 傍聴者 なし

6 議事の概要

(1) 開会

9 時 00 分、教育長が開会を宣告。

(2) 前会会議録の承認

第 1537 回京都市教育委員会会議の会議録について、全委員の承認が得られた。

(3) 議事の概要

ア 議事

議案 5 件、報告 1 件

イ 非公開の承認

議案 4 件、報告 1 件については、市長の作成する議会の議案に対しての意見の申出及びその他の関係機関と協議等を必要とする事項に関する案件、個人の権利利益を害するおそれがある事項に関する案件であり、京都市教育委員会会議規則第 3 条に掲げる「非公開事項」に該当するため、京都市教育委員会会議規則に基づき、非公開とすることについて、全員の承認が得られた。

ウ 非公開の宣言

教育長から、議案 4 件、報告 1 件について、会議を非公開とすることを宣言。

エ 議決事項

議第 27 号 令和 8 年度学校教育の重点について

(事務局説明 土田 学校指導課長)

「令和 8 年度学校教育の重点」について資料に沿って説明する。

初めに、議案説明資料「1 改訂のポイント」について、説明する。第 1 章の「目指す子ども像と 3 つの姿」について、伝統や文化を学ぶ意義は何か、またこれらを学ぶことが未来へどのように繋がるか意識した内容とすると共に、この「学校教育の重点」を手にする教職員に伝わりやすいよう、説明を工夫した。

第 2 章の「5 つの柱」では「ひろがり」を中心に、課題と感じているカリキュラム・マネジメントや新たな視点として意識すべきスクール・コミュニティ等の取組に関して、記載の充実や新規項目を追加した。

第 3 章の「重視する視点」では、多様な他者との関わりを大切にすることをイメージしやす

い表現とした。

第4章の15の取組では、現行学習指導要領をしっかりと捉えながら、次期学習指導要領に向け、論点整理で示されている考え方も視野に入れ、個々の教育活動を充実していくという内容に変更した。

続いて、「1 改定のポイント」で挙げた項目も含め、次年度に向けた主な変更箇所について「2 主な変更点や新たな要素」で詳しく説明する。第1章の目指す子ども像については、「伝統と文化を受継ぎ」という前半と「次代と自らの未来を創造する子ども」という後半のつながりが見えにくく、本文でもそこが書けていないとの意見が昨年度からあった。なぜ伝統や文化を学ぶことが未来につながるのか、そこにどんな大切なことがあるのかを伝えられるよう改訂した。「伝統や文化を学ぶことは」から始まる文章にも、技術や技能、言葉など、見たり聞いたりできる事だけではなく、価値観や精神性なども学ぶことができ、自分自身との重なりやつながりを思う中で、伝統や文化の良さとともに、自分の良さや可能性も発見・認識できるといった大切なことにつながり、「生きる力」へ結びついていくものであることを表している。また、子ども像の表現の部分は、「伝統と文化を受け継ぎ」から「伝統や文化に学び」とすることで、学ぶ側の主体性と自己選択も含めた広がりを表した。

第1章の下半分にある「3つの姿」についても、文化の継承・発展の担い手の育成を目指す取組の充実を行うことが、なぜ必要なのかを具体的に表すなど修正を加えた。「体験で終わるだけでなく、伝統文化から得るもの学ぶものを、これから生きる中で生かすことが大切である」や、「伝統文化体験が教育に生かされるという認識を教職員に持っていただけるような内容としてはどうか」との意見をもとに、教職員が手に取って読んだとき、その意図が伝わるような表現とした。

第2章では、全教職員に意識してもらいたいことを、5つに柱立てして記載した。「ひろがり」の項の②のカリキュラム・マネジメントについて、教科間のつながりを意識することは一定できていることが多いが、学校や教職員間での理解度の差が感じられ、実施してどうだったのか、PDCA サイクルを意識して改善に向かうことが十分でない学校が多いと感じられることから、人や教育資源の有効活用という視点も含めて、今一度、次期学習指導要領へと進む前に、カリマネの重要性を認識してもらえよう、その部分を文中や図に、新たに表現した。

「ひろがり」の項の③では、新京都戦略「公共空間をまちに開くパブリック『テラス』プロジェクト」にも関わる部分であり、学校を核とした地域づくりという意識のもとで、学校施設をまちに開き、多様な人々や活動が交じり合う新たな学びと協働の場とすることで、そこから地域の活性化につながり、それが子どもの健全育成や学校の教育の充実にもつながるといふ、好循環の創出について記載した。

第3章では、単年度ごとの重視する視点を記載している。現行では、『子どもの「主体性」と「社会性」の育成を目指し、「自ら学ぶ力」と「自ら律する力」を学校・幼稚園全体の教育の中で高める』としていたが、新しい案として、『子どもの「主体性」と「社会性」の育成を目指し、「自ら学ぶ力」と「自ら律し、協働する力」を高める』とした。

重視する視点について、これまでの表現では「自ら学ぶ力」「自ら律する力」と、「自ら」が2つ並ぶなかで、昨今ますます重要さが高まっている、多様な他者との関わりを大切にするという部分がイメージしにくいことを、言葉を加えることで改めた。これまで教育委員の皆様からも、「『自ら学ぶ力』と『自ら律する力』は、一つのメッセージとしてあってもいいと思うが、『自ら律する力』を育てるためには他者との対話が必要。」「『軸』を持って議論できることは大切。軸があるからこそ、自分と考えの違う人との間で対話ができる、対話をするということではないか。」「重点には『対話』や『共生』などのキーワードを踏まえてもいいと思う。」「文化を学び、身につけている人にとっては、『自ら律する』を、『社会に開かれたもの』で『共感』につながる要素があると理解されやすいが、そうではない解釈になりやすいため、手が入れられたらいいと思う。」との意見を頂戴していたため、そのような内容も踏まえ検討した。

また、表題の下に書いている「基本的な考え方」の内容も、今の時代にこれらの力がなぜ重要なのか、具体的なイメージとともに示した。

第4章の総論については、かねてから本市教育が大切にしてきた「一人一人の子どもを徹底的に大切にする」教育理念を大切にしながら、改めて現行の学習指導要領で重視されている「生

きる力」を育むために重要となる3つの資質・能力にも触れ、これまでの章と、第4章として「生きる力」を育むための具体的な取組に向けて伝えたいことを概括して記載している部分である。ここに、現在、国で検討が進められている「次期学習指導要領に向けた考え方」についての図も示し、そうした考え方を基にしたうえで個々の取組にもつなげるようにという趣旨で記載した。

第4章「15の取組」の項目2の③について、12月の勉強会の際の意見を元に、「AIが身近にあることを前提に、教員としてどうやって深い学びを実現させられるのか工夫が必要」、「豊かな言語活動、表現力を養うことはAI活用が広がる中であっても大切」との視点から、生成AIのリスクを踏まえた教育活動の推進の必要性を記載した。生成AIは、今となっては便利なツールとして多くの人が利用しているが、教育現場で使うにあたっては、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の資質・能力の育成に資する効果的な使い方となっていることが重要であり、「安易に頼る」ということではなく、「効果的に活用する」という意識をもって、学びを広げたり、深めたりするために、役立てるものと考えている。その際、子どもたちが生成AIによる誤った情報や情報の偏りをそのまま理解してしまったり、学習活動をするうえで過度に依存してしまったり、出力された情報をそのまま鵜呑みにしやすく、子どもたちが学ぶ上で必要な学習過程が欠けてしまい、資質・能力の育成を妨げるリスクがあることを教職員がしっかり理解したうえで、活用を検討することが大切である。また、教職員自身が具体的な活用の効果やリスクを吟味できるように、生成AIや情報モラルに係るリテラシーの涵養に努めることの必要性にも触れた表現とした。

「3. 探究活動・京都ならではの教育の充実」③について、科学・技術の発展に伴い、それらを学ぶことの重要性について注視されている中、科学・技術を学ぶことの重要性を伝えるとともに、文系・理系の枠を超え、各教科の学習をベースにさまざまな情報を活用しながら、実社会での課題発見や解決につなげる教育手法であるSTEAM教育に関する項目を追加した。

「13 飲酒・喫煙・薬物に関する指導」の①について、勉強会の際、「薬物について、違法薬物はもとよりオーバードーズについて注意喚起が必要ではないか」とのご意見もあり、学校現場においても、オーバードーズという言葉に対し意識をしていただく必要があると考え、本項目で表現した。

(委員からの主な意見)

【石井委員】 カリキュラム・マネジメントに関しては、次期学習指導要領の改訂を見据え、学校教育目標を実現するためのものであるという視点からの「攻めのマネジメント」を意識することが大切である。そのために、教育課程全体で目標と評価の一体化を目指すことが重要である。また、校園長自ら学校を創っていくという「オーナーシップ」を促すことが大切である。

校園長は、学校教育の重点で示している目標をそのまま学校教育目標に置き換えるのではなく、学校をマネジメントするという意識を持ち、内容を改めて捉え直し、学校の実情に即した目標を設定するというプロセスが重要である。学校教育目標は、教職員のみならず、可能な範囲で子どもを含めて共有し、共通理解することが望ましい。目標が共有されているほど、学校評価が具体的な改善に結びつきやすくなる。

地域との協働について、学校と地域との関わり（関係者）が増えると、学校のマネジメントコストが上がってしまうが、学校教育目標の軸があれば、必要とする連携先が明確になるため、子どもたちの学びの充実に繋がる。

また、学校現場では授業も柔軟に組めるようになっているので、自由にカリキュラムが組めるというメッセージも発信できるとよい。

【松山委員】 OECD (PISA) の研究結果を見ると、学校教育の経年スコアは2012年頃を境に変化が見られ、SNSが普及した2014年以降は世界的に低下傾向が見受けられた。日本は他国と比べるとさほど大きな影響を受けていないが、少なからず影響は受けている。海外の大学においても、「WHY (なぜ)」「HOW (どのように)」といった即効性中心の教育が強まり、表面的で要領のよい学びが増えているのではないかと懸念している。

禅では「Why & How」を教えない。単純に「今静かだよ」と問いかけ、「そう

ですね」というやり取りだけだと、静かであることは分かる。しかし、静かなところにあえて、ししおどしの音を立てることで、静かだと実感として気付かせることができる。直接的に言うと伝わらないが、深い味わいや学びがある。伝統や文化を学ぶということは、答えを与えられない中で自ら意味を見いだす過程に価値があり、その過程が人間の成長につながる。自ら気づき、発見する学びが失われると、深い理解が困難になるため、「気づかせる学び」を育てる訓練が学校教育の中で重要である。

また、部活動や集団で何かを作り上げる経験の少ない世代が教員になる将来を見越して、教職員もそのような経験や体験をすることが必要だと感じる。世の中ではタイパ・コスパと言われているが、あとに何も残らないため、時間の無駄だと感じる。

【石井委員】 残す学びが必要であるが、十分に経験しないまま成長してしまっているのではないか。学の原因は「まねぶ」である。「アウトプット」など、人を情報処理機械のように扱っている言葉が増えており、違和感がある。研修の場でもアウトプットしていただきではなく、対話や議論と表現してはダメなのか。言語能力と情報活用能力は切り分けるべきだと感じている。

学んだけど残らないとよく聞かすが、学びの本質は、答えを突き付けられるのではなく、自ら考え、試行錯誤しながら掴み取るその過程にある。低学年からそのような経験を積んでほしい。

【野口委員】 各委員の多様な意見がある意見を、重点に取り入れていただいてありがたい。

【濱崎委員】 国際社会の動向や政治へ関心を持ち、グローバル化への対応力や多様性の理解が重要である。このようなことは、小学校段階から育成することが必要であると考える。

【事務局】 京都市では、英語を小学校1年生から学んでおり、ALTと関わる中で、様々な文化や多様性を学んでいる。

文科省の人権教育の研究指定を受けている学校では、地域に暮らす外国出身者や多様な背景を持つ人々との関わりを通じた学習を行っている。そこで、子どもたちは、「外国の人との違いを互いに受け入れ合い、みんなで仲良くすることが大切だ」という考えにすぐたどり着くが、そこから先、実際に自分の身の回りに寄せて考えて、あるいは社会の課題にも視点を広げて、状況は単純ではなく様々な困りと意見があること、他者と生きる人権感覚など、学びをさらに深められるように、教員が工夫を考えているところである。

【濱崎委員】 多文化の理解も重要だが、そこにとどまらず、海外で起こっている戦争や国政選挙について等、今の国際情勢や社会の動きに子どもが目を向ける機会が学校教育の中にどれほどあるか。生活上の身近な題材を扱う学習も重要であるが、学校や家庭、地域の枠にとどまらず、子どもが「今世界で起こっている事の中に生きている」という認識を持つことが重要である。

【事務局】 朝の会などで新聞記事や時事的話題に触れる機会を発達段階に応じて設けている。また、NIEの学習を通して新聞やニュースを多角的に読んでいく学習にも取り組んでいる。

【松山委員】 近年、SDGs、ESG、DEI等の概念が失われつつある。近い将来には消失する可能性もある。このような国際的な価値観の変化、世界的な分断の進行の中、日本が比較的影響を受けていない状態にあることが評価されている。

【笹岡委員】 「井の中の蛙」でいることは楽であるが、知らないことを知る経験は、子どもが自ら考え、視野を広げ、成長する上で重要であり、その機会を提供することは学校の大きな役割である。家庭における学びも重要であるが、学校の教員から日常的に語られる言葉や話題は、子どもの記憶に残りやすい。

(議決)

教育長が、「議第27号 令和8年度 学校教育の重点」について、各委員「異議なし」を確認、議決。

(4) その他

○教育長から、前会会議以降の主な出来事等について報告

1月14日 文科省 緊急教育長会議（暴行・いじめ）

1月16日 Apple Japan 社長による市長表敬訪問

1月21日 文教はぐくみ委員会

1月24日 探究エキスポ生徒実行委員会との座談会（市民対話会議）

1月28日 令和7年度小学校演劇鑑賞教室

○事務局から、当面の日程について説明

(5) 閉会

10時30分、教育長が閉会を宣告。

署名 教育長